

刊行のことば

世界は一刻も休んでいない。しかも、今日は、交通通信の発達により、国境を越えた人、物、金、情報等の流通がますます活発になりつつある。いわゆるグローバリゼーションの流れの中で、世界各国の社会経済は、過去には見られなかったような速さで変化しつつある。農業といえども、その例外ではあり得ない。

日本の農業も、独自の条件をもっているとはいえ、世界の農業とのつながりは、ますます大きくなっている。世界とともに考え、世界とともに伸びるのが、日本農業の今日の使命である。この叢書の目的とするところは、まさにこの使命を忠実に実行するところにある。

編集委員

安藤 光 義	鈴木 宣 弘
加瀬 良 明	立川 雅 司
河原 昌一郎	三石 誠 司
	(五十音順)

高齢化するイングランド農村

解題/翻訳 安藤 光義

解題	2
高齢化する農村	8
1. はじめに	8
2. 人口統計に見る高齢化	9
3. 老後の境目	12
4. 老後の分断	15
5. 高齢者の経済的潜在力	19
6. 世帯収入と高齢者が持つ金の力	22
7. 農村コミュニティへの貢献	26
8. 高齢者へのサービス	28
9. 結論：すべての世帯のための農村に向けて	31

解題

安藤 光義

一般の農村のイメージは、引退した高齢者たちが、経済的には不活発だが、静かに平穏な生活を送っている場所というものだと思われるが、以下に紹介する「高齢化する農村」はそれを覆そうとする。より正確に言うならば、社会全体の高齢化の最前線に農村が位置しているのは間違いないが、その内実をつぶさに見れば様々な動きが交錯しており、それを把握することで奥行きのある農村の鳥瞰図を描くことが本稿ならびに本稿が収録されている本(『高齢化する農村 イングランド農村の高齢人口の増加』)の狙いであると思われる。イギリスの農村については条件不利地域政策がやや突出したかたちで詳しく紹介されているが、カウンターアーバナイゼーション(農村地域への人口移動現象)が進んでいるイングランド南部も含めた全体像を理解するための一助に本論文はなるだろう。ただし、本全体を総括する役割を担っている論文であるためか、あるいは、イギリス人特有の「牛のハイキング」のような散文という面があるためか、直線的な整理をして理解するのはなかなか難しい面があるかもしれない。そのためこの解題もまとまりに欠け、評者が本論文から感じた点を並べるだけに終わっている点を最初にお詫び申し上げておきたい

すぐ前に記したようにイギリスの農村を考える場合、カウンターアーバナイゼーションは非常に重要な要因であり、この点が日本との決定的な違いである(ただし、日本も地理的空間的性格から農村を把握し、例えばあるエリア内の人口および人口密度等に基づいて「農村地域」を定義し直せば統計的に同様の現象を検出することができるかもしれない) 40歳を過ぎた人々、特に「中産階級」高学歴で専門職に従事し、意識が高く社会的に活発な運動を展開するような階層が人生を一新するために農村へ移住するという動きがイギリスでは定着しており、それが農村を「内側から」変容させる1つの要因となっているようである。例えば、こうした移住者は農村では熱心な環境運動家となり、

それが近代的農業の告発、厳格な土地利用規制への支援者となっていった。話は解題からさらに逸れるが、BBCは「農村への脱出 Escape to the country」という番組を放送している。これは都会の家を処分して農村への移住を考えている家族に、その予算と希望するロケーションに見合った農村の住宅を複数紹介し、選んでもらうという内容で、農村を志向する人々の意識を何とはなしに垣間見ることができる。閑話休題。いずれにせよ農村は高齢化も進むが、都市よりも早いペースで人口増加がみられるというのはイングランド農村の真の姿であり、このカウンターアーバナイゼーションを起点に様々な動きが農村で生じることになる。1つが小規模事業の叢生であり、もう1つがコミュニティへの刺激である。

農村への移住者は、引退後の移住ではないため、そこで生計の資を得るための経済活動を展開するが、これが農村をますます農林水産業に依存しない地域へと転換させていく。そうした農村地域経済の中で重要な役割を果たすことが期待されているのが小規模事業 Small business である。この小規模事業は個人として営まれていてもベースは世帯にあり、それが柔軟な対応を可能にさせていると把握されているようだ。例えば、数年前の出来事だが、口蹄疫の蔓延を防ぐために農村への訪問が禁止され、ツーリズム等に大きく転換した農村経済にとっては一大危機を迎えたことがある。この危機を何とか乗り越えられたのは、1つは後で述べる「年金」経済の下支え、もう1つが「世帯」さらにはそれに連なる親族も含めた広い意味での「家族」が有していた「強靱性」であった。この「世帯」の「強靱性」は、かつてチャーノフが描いた「小農の姿」を彷彿させるものがある。イギリスの農村経済研究の1つの蓄積が「世帯」に基礎を置く小規模事業の研究であり、この点は今後学ぶべき内容があるように思う。

農村への移住者の多くは「終の棲家」を求めてやってくるため、本来的に地域のコミュニティに積極的に関わろうとする傾向がある。農村に意思を持ってやってきた人々ということであろう。そして、こうした人々は「内発的な発展」の原動力となる可能性がある。この文脈は日本と全く同様だが、カウンターア

ーバナイゼーションという「追い風」は吹いていない（統計のとり方によっては本当は吹いているのかもしれない）点は決定的に異なる。ただし、逆にイギリスの場合は生まれ故郷へのUターンという動きは弱く（正確にはカウンターアーバナイゼーションの力が強すぎて、目立たないだけのこともかもしれない）ある地域への帰属意識の形成を常に働きかけなくてはならないという、日本の価値観にどっぷり浸かった人間からみると「手間のかかる」社会構造と言えなくもない。それはともかく、その場所で居住する意思を持った人々は、特に高齢者ほど地域のまとめ役（農村コミュニティを1つに束ねる「接着剤」を供給する存在）となり、熱心な地域ボランティア活動の担い手となっている。また、地方機関はこうしたボランティア組織に様々なサービスの提供を下請けに出す傾向が強まっているようだ。しかし、ボランティア組織の安定的な継続は難しく、また、その活動レベルにも差があるため、地域の自主性に任せることは裏を返せば行政の責任の放棄であり、福祉サービスの水準に地域的な「まだら模様」が生じる危険がある。また、移住者は旧来からの住民と社会的性格が異なるケースもあるため、場合によっては地域社会が分断されてしまう可能性があることも否定できない。これは日本で言えば「混住化」の評価をめぐる問題にあたり、農村への移住は日本ではまだまだ弱いベクトルかもしれないが、比較研究を行うことで、様々な社会の成り立ちの違い、あるいは共通点が、ここを「窓」として見えてくるようにも思う。

先に触れたが、「年金」経済が農村地域経済の下支えとなっているという指摘は重要である。口蹄疫病の感染を防ぐために閉鎖されたカンブリアの農村地域の経済を支えたのは10億ポンドの年金収入であった。また、年金という安定的な収入が「世帯」の柔軟な行動を可能にしているという点も興味を惹かれる。農村地域経済を構成する「世帯」の生計は「年金プラス」という構造となっており、これが小規模事業や自営業への積極的な進出の下支えとなり、また、低賃金でのパートタイム労働力としての雇用を可能にし、農村地域経済の「強靱性」「柔軟性」に繋がっているというものである。また、都市と比べて高い農村の高齢者の就業率は、高齢者の「労働意欲」「社会参加意欲」を農村の方が反

映しているとする。ただし、この点は手放しの評価ではなく、「本当は働かなくては生きていけない」だけなのかもしれないし、自営業も「やむを得ない就業形態」かもしれないとしている（このあたりの真意がなかなか読み取りにくく読者も苦勞されると思う）。とはいえ、全体的なスタンスは、兼業農家を社会的安定階層として位置づけたそれと似通っており、「年金+小規模事業・自営業・パートタイマー」という「世帯」の生計の構造をプラスに捉えるものであり、「多就業」を低賃金労働力と結びつけて批判するものではない。これは「賃金水準」よりも「雇用創出」を優先する政策スタンスにも反映している。

農村における住居の地理的な分散がもたらす問題も指摘されているが、これは日本でも既に大きな問題となっているのかもしれない。車がない世帯の行動範囲は著しく狭められており、高齢者・貧困者の社会的な弱者としての性格を一層強めている。また、行政側にとっても介護サービスの必要性を正確に把握し、それを効率的に供給することを阻む大きな要因にもなっている。ただし、だからといってそうした人々を一箇所に集めることは問題があり、頑張れる限りは自らが余生を送ると決めた自宅で過ごすことの方が、社会的経済的にはメリットは大きいのではないかとみている。もっとも、最終的には施設に入るというのが共通の社会的認識であり、問題はどの時点でその決定を行うかという点にあるということかもしれない。また、農村の住宅は富裕者向けのものばかりであるため、身体的能力が衰えた高齢者には不向きで（階段の昇降など）、彼らに見合った住宅を供給する必要があるとしている。イギリスと日本とでは農村の住宅事情はかなり異なっているとは思いますが、日本でもその状況に応じた対策が今後必要になってくるかもしれない。

イギリスの家族といえれば典型的な核家族を思い浮かべてしまうか、元気な高齢者は「働き」「社会に貢献する」だけでなく、孫の面倒をみるなど子供たちを積極的に支援しており、世代間の相互扶助は広範にみられるらしい。これは小規模事業が危機を迎えた時にもみられた現象のようだ。古くなるが、アラン・マクファーレンの『イギリス個人主義の起源』の印象が強い評者などには、イ

ギリス家族の多面性を感じさせてくれる。その一方で、高齢者にとっては「自分にとって会いたい人がいるかどうか」が大きな問題であり、それが満たされていない孤独な老人も多く、「75歳以上のほぼ5人に1人が生きていても仕方がないと感じている」というのもイングランド農村のもう1つの真実の姿のようだ（高齢者の350万人が孤独であるとするBBCの報道もある）

最後になるが訳出に際して注意したい点を2点記しておきたい。

1つは、部分的ではあるがruralを「農村地域」とした点である。この点については吉岡裕氏の解説が参考になる。「ルーラル」という英語は、わが国では「農村」と訳されてきたが、この言葉には、その地域の主な産業や自然環境が農業に関係するかといった意味合いは全く含まれておらず、本来「非都市地域」を意味する言葉である。日本語の「地方」あるいは「田舎」というニュアンスに近い（しかし、ここでは、日本の読者に違和感を与えないようにしながら、しかも慣用の「農村」という言葉を選んでは、「農村地域」と訳すことにした）（注1）文章の流れ等を考え、ここでは全てを「農村地域」と訳しなかったが、以上のような意味として用いていることを理解して頂けると幸いである。また、countrysideを「農村」あるいは「農村地域」としたのは、そこに生じている社会関係を射程に入れた場合（例えば旧住民と新住民との軋轢など）「田園」あるいは「田園地域」では、そうした意味合いがやや曖昧になってしまうように思えたためである。Ruralあるいはcountrysideをどのように訳出すかという問題は、国際比較研究を行う場合の「農村」の定義にも関わってくる問題と繋がっており、今後、時間をかけて検討していく必要があるように思う（注2）

もう1つが、文中に「農村地区」という用語が出てくる点である。これは人口統計がlocal authority districtレベルでしか把握できないというイギリス側の事情を反映したものであり、センサスの「農村地域」とは異なる範疇である。農村地域の人口を論じている箇所が「農村地区」となっているのはそのためである。なお、2003年現在、イングランドのlocal authority districtは354あり、その

うちurbanに属するものは176で、人口は31,201,745人（全体の63.5%）、ruralは178で、人口は17,940,387人（36.5%）となっている。

最後の蛇足になるが、もともとの訳文は長い間英語から遠ざかっていた評者のリハビリのためのものであり、その後、かなり修正を加えたとはいえ「逐語訳」的な硬さが色濃く残っている点、何卒ご容赦願うとともにお詫び申し上げる次第である。

【注】

1) 吉岡裕『英国の政治と農業』農林統計協会（2002）67頁

2) 例えばOECDはrural communityの人口密度が1km²あたり150人未満の地域をruralとしているのに対し、日本では500人未満としているという違いがある。OECD, Creating rural indicators for shaping territorial policies, 1994. この点については坪井伸広氏からの個人的な示唆による。

謝辞：

本論文を訳出した後、不明な点については執筆者のPhilip Lowe教授から直接話を伺う機会を持つことができたが、村上佳代氏（ニューカッスル大学農村経済センター・リサーチアソシエイト）に同席いただき、評者の不十分な理解を補足していただいた。ここに記して感謝したいと思う。なお、村上氏は現在、農村地域への移住に関する日英比較研究を手がけていることも付け加えておきたい。

高齢化するイングランド農村*

フィリップ・ロウ&リディア・スピークマン
安藤 光義 訳

1. はじめに

高齢化は農村地域をかたちづくる決定的な要因となっている。イングランドの農村地域では5人に2人が50歳以上、4人に1人が60歳以上、12人に1人が75歳以上となっており、この割合は増加している。私たちが greying countryside と呼ぶ過程は農村地域の社会構造だけでなく、農村地域経済の機能にも深い影響を与えている。事実、私たちの社会全体が高齢化しており、人口の流入と高齢化との相互作用によって都市地域より農村地域の方が高齢者の割合が相当程度高くなっている。イングランドでは農村地域居住者の年齢の中央値は、都市の36歳に対して42歳である。

農村地域は大きな社会転換の最先端に位置している。そして、人口高齢化がもたらす広範なインパクトを理解するに際し、政策の策定や分析に携わる者に対して重要な参考となる論点を提供してくれる。本書 (The Ageing Countryside) の著者のうちの2人、Champion と Shepherd (第2章) は、イングランドの農村は人口高齢化において先駆者としての役割を演じていると述べている。greying countryside は高齢者の生活と農村地域の生活という一般的な想定に異議を唱えるものなのである。

実際、この本は「高齢化」と「農村」という2つの概念を採り上げている。両者は相互に強化された固定概念にどっぷりと浸っており、私たちの社会では両者は休息、撤退、分離という言葉の意味を背負うものとして捉えられている。両者の組み合わせにより、2つの概念は典型的な「農村への引退」という

* Philip Lowe and Lydia Speakman, "The greying countryside"

概念となる。それは静止状態、いわば、活動停止の場所というものである。農村地域に移住した高齢者は自分たちのことを「出世競争から脱出してきた」と言う (Halfacree, 1994)。しかしながら、農村に対する一般的な認識や願望にもかかわらず、定年移住の greying countryside に対する貢献は僅かではない。それどころか、引退後の時間である隠居と老後生活 (これまで多くの人々が「高齢期」と呼んできたもの) のための場所としての農村地域というイメージは、農村地域経済や高齢者のライフスタイルの現状とますます一致なくなっている。そうした状況を踏まえ、本書の重要な目的は、農村における高齢化に関する公共政策論争をしばしばあまりに曖昧なものとしてきたこの神話と時代遅れの先入観念に立ち向かうことにある。

greying countryside のダイナミズムは複雑で絶えず変化している。最近数十年の間に農村地域経済は農業からサービス産業を基礎とする経済に転換してしまった (Countryside Agency, 2003)。農村地域に加わった中高年層の新たな世代は、彼らの親の世代よりも長く活動的な生活を享受することが十分に予想される。人口構成比と比べて不釣り合いなほどに多くの中高年層は農村地域で暮らし、また、暮らすようになってきており、そのニーズや需要は農村地域の公共および商業的サービスに対して支配的な影響を及ぼすようになってきている。

本書は greying countryside の様々な局面に焦点を当てた、著名な専門家による小論文を集めて1つにしたものである。執筆者たちは高齢者の生活や農村地域の生活が多様に変化する姿を描いており、老後における人々の移り変わりが農村という文脈によっていかに形づくられ、逆に農村という文脈を形づくることになることについての理解を追求している。全体としての目的は支配的な傾向と推移に光を当て、高齢化する農村が社会に提起する鍵となる取り組みを明らかにすることにある。

2. 人口統計にみる高齢化

「人口統計にみる高齢化」とは変化する年齢別人口構成を描くためのもので